

〔巻頭言〕

私の S P F 養豚感

(株)サンエスブリーディング 名越 仁 宣

私が SPF 豚に携わるようになって早 21 年が過ぎた。21 年前、弊社の全身である住商飼料畜産(株)入社当時は GP 農場勤務をしており、日々種豚候補豚のセレクションや出荷業務を行っていた。特に、春から夏の種豚需要期には何口もの出荷が重なり忙しく過ごしていた。そんなある日、いつもは一番早く出勤する出荷担当の班長さんが定時近くになっても出勤してこない。どうしたのかと思っていたら電話が入った。『昨日は休みだったから、家族と一緒にちょっと遠出をして観光牧場に行ったんだ。そこにはポニー、牛や羊などがいて娘と一緒にみていたら、隣の柵に豚がいたんだよ。びっくりしてすぐに離れたし、もちろん触ってもいないけど、そばまで行ってしまった。だから 3 日間農場には入れない。』こういう話だった。当時の私は、それがどうした、この忙しいときに班長さんが休む理由なのかと思っていたが、他の先輩農場員たちは、『それじゃあ、しょうがない』とゲラゲラ笑っていた。

3 日後、班長さんが農場へ入ってきた。

皆から冷やかされ、申し訳なさそうに笑いながらも当然の行動だという顔をしていた。

私は、『俺も休みたくなったら、外で豚のいるところへ行けばいいんだね。』と毒づいていた。

その時の班長さんのとった行動、判断がいかに立派なものかと本当に理解したのは、それから何年も経った後だった。今でもたまにそのことを思い出すときがあるが、班長さんは自ら判断しとっ

た行動に自信を持ち、プライドのある ‘いい顔’ をしていたと思う。

SPF 豚とは、そもそも外科的手術により微生物群を排除された状態で作出された豚だ。しかし、そんな手法を用いなくても清浄な種豚や豚は現在いくらでもいるだろう。昨今、肉豚事故率が増大し、導入される種豚候補豚の清浄性が望まれているが、我々 SPF 豚業界もそういう意識改革に寄与していると思う。また、バイオセキュリティーの重要性が叫ばれているが、我々が 14 年前に制定した SPF 豚農場認定規則における防疫管理および設備基準がまさにそれであろう。

SPF 養豚ということであれば、技術だけでなく、‘隔離と遮断’を遵守するという姿勢。閉鎖的な集団を構築しながら、豚、人、車両、動物、物品などを遮断していくこと。当然、それに適した施設、ハード面が必要であるが、それ以上に重要なのは個々のもつ防疫意識、私が入社当時出会った班長さんのように、プライドをもって自ら考え行動する姿勢だと思う。前述したように結果的に清浄な豚はいくらでもいるが、原原種豚の作出からこだわっているのが我々である。

自信と誇りを持っていきたい。

個々の防疫意識に上限はない。ただし、あんまり杓子定規に厳しく自らを規制しても ‘肩がこる’ばかりなので、多少のバランス感覚もないと…、と本音で思っている私はまだまだ甘い。